

考える力を育てる生活科の授業づくり

～愛知県三河地区の生活科授業からの考察～

Making Classes Fostering the Ability to Think in Living Environment Studies

野田 敦 敬
(生活科教育講座)

Atsunori NODA
(Department of Living Environment Studies Education)

I はじめに

平成 20 年に小学校学習指導要領が改訂され、平成 21・22 年の移行期を経て、今年度から全面実施となった。第 3 期の生活科のスタートが切られた。第 3 期生活科においては、生活科の趣旨や理論の構造化・明確化が配慮されると共に、「気付きの質を高める」がキーワードとなった。また、教科目標は、変更ないが、学年目標に 1 項目追加され、学年目標 (3) として、「自分自身に関すること」を定めた¹⁾。これらは、平成 15 年に愛知県岡崎市で開催された全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会全国大会以来、三河地区各地で、気付きの質の高まりや自分自身の気付きの大切さを地道な実践研究を通して明らかにしてきたことが、確かな手応えとして中央にも伝わり、改訂の柱になったことは間違いのないことである。

さて、全国的には、「気付きの質を高める」実践研究が移行期から進められてきている。三河地区では、今、求められている「考える力」や「コミュニケーション能力」の育成などの教育の課題を見据えて、新たな実践研究を積み上げていく必要があると考えた。

平成 18 年の学校教育法の一部改訂を受け、平成 20 年 1 月の中央教育審議会「答申」では、学習指導要領改訂の基本的な考え方の一つに、学力の 3 要素の一つとして注目をされている思考力・判断力・表現力等の育成があげられた²⁾。国の方針として、これからは「考える力」の育成を目指していると言えよう。

そこで、平成 22 年秋から三河教育研究会の生活科部会関係者と数回にわたる検討会をもち、平成 23 年 8 月初旬に豊橋で開催された愛知県生活科研究大会において、より子どもの「思考」を見取ることに重点を置いた新たな理論の骨子を発表したのである。まだまだ変更の余地のある理論であるので、この理論を基にした実践研究の成果から、この理論を磨き、実践研究の積み上げを期待している。

本研究報告は、平成 23 年度に三河地区の 10 市で参観した 16 の生活科授業から、三河地区の生活科学習の現状と課題を明らかにしたい。

II 対象とした16の生活科授業の全体的な傾向

平成 23 年度に参観した愛知県内の生活科の授業 (順に授業番号・参観月日・学校・学年・単元名)

- ① 6月1日 (水) 愛知教育大学附属岡崎小学校
1年「じぶんだけのいろとかがやきを！
とっておきのぴかぴかどろだんご」
- ② 6月10日 (金) 豊田市立矢並小学校
2年「ぼくの・わたしのスーパーカーを作ろう」
- ③ 6月21日 (火) 田原市立東部小学校
1年「がっこうだいすき！
TOB29 たんけんたい」
- ④ 6月23日 (木) 刈谷市立小垣江小学校
2年「大すき！おがきえっ子やさい」
- ⑤ 7月4日 (月) 高浜市立港小学校
1年「なつとなかよし (シャボン玉遊び)」
- ⑥ 7月7日 (木) 豊川市立御油小学校

- 2年「レッツゴー！町たんけん
～みんなの知ってる？こうえんのヒミツ～」
- ⑦ 9月15日（木）豊橋市立岩西小学校
2年「みんなで行こう！ 岩西のおみせやさん」
- ⑧ 10月18日（火）安城市立高棚小学校
2年「知りたいな、おじいさん・おばあさんの
えがおのひみつ」
- ⑨ 10月26日（木）豊橋市立岩西小学校
2年「ガンバ！ビッグスマイルだいこん作り」
- ⑩ 10月27日（金）田原市立東部小学校
2年「もっとよくしよう！
風・ゴム・磁石 けんきゅうじょ！」
- ⑪ 11月7日（月）安城市立今池小学校
1年「あきとなかよし」
- ⑫ 11月24日（木）刈谷市立双葉小学校
2年「めざせ！ロケットマスター！」
- ⑬ 11月29日（火）碧南市立大浜小学校
1年「あきみつけ ～種っておもしろい～」
- ⑭ 12月1日（木）西尾市立中畑小学校
1年「カレーパーティーをしよう」
- ⑮ 1月23日（月）岡崎市立六ツ美西部小学校
2年「おいしい大根を育てよう」
- ⑯ 1月30日（月）安城市立今池小学校
2年「はっけん くふう おもちや作り」

表1 全体的な傾向

授業番号	主な生活科の内容	主な活動	主な手立て
① 6/1	(6)自然遊び	聞き合う	互いのどろ団子の比較
② 6/10	(6)自然遊び	紹介し合う	風・ゴム・磁石で動く互いのおもちやの比較
③ 6/21	(1)学校探検	紹介し合う	音楽室での発見の共有、参観している教師への聞き取り
④ 6/23	(7)栽培	教え合う	世話の仕方を教え合う、三色の気持ちカードの活用

⑤ 7/4	(5)(6)季節の自然遊び	屋外での活動	本時でしたいことを教師に伝えて活動
⑥ 7/7	(3)(4)町探検・公共施設	発表し合う	二つの公園の特色の比較、板書
⑦ 9/15	(3)町探検	紹介し合う	お店のことを比較しながら紹介
⑧ 10/18	(8)交流	班で話し合う	ゲストティチャー、アドバイスカード
⑨ 10/26	(7)栽培	話し合う	大根を1本にするか2本にするか、板書
⑩ 10/27	(6)自然遊び	話し合う	体育館での班別ワークショップの場所決め
⑪ 11/7	(5)(6)季節の自然遊び	製作活動	悪い見本と比較して改良
⑫ 11/24	(6)自然遊び	製作活動	班の中でのアドバイス、名人との比較
⑬ 11/29	(5)(6)季節の自然遊び	発表し合う	種の秘密の比較
⑭ 12/1	(2)(8)家庭・交流	班で話し合う	カレーに入れる具について話す、具体物の準備、板書、三色の気持ちカードの活用
⑮ 1/23	(7)栽培	話し合う	栽培した大根の食べ方、板書、三色の気持ちカードの活用
⑯ 1/30	(6)自然遊び	話し合う	班別ワークショップの場所決め、板書

*「主な生活科の内容」の（）数字は、生活科の9つの内容(1)学校と生活、(2)家庭と生活、(3)地域と生活、(4)公共物と公共施設の利用、(5)季節の変化と生活、(6)自然や物を使った遊び、

(7)動植物の飼育・栽培、(8)生活や出来事の交流、(9)自分の成長に対応している。

第1学年6授業、第2学年10授業である。1学期が6授業、2学期が8授業、3学期が2授業となった。表1より、「主な生活科の内容」では、内容(6)自然や物を使った遊びに関する授業が8つと半数を占めた。また、「主な活動」では、「発表し合う」「紹介し合う」「話し合う」などの言語活動がほとんどを占めている。「主な手立て」では、思考を促す手立てとして、「比較」が多くの授業をで用いられている。このことから、三河地区での生活科の授業、特に校内研究授業や研究発表会時の公開授業では、言語活動と中核にし、「比較」という手法を用いた考える授業が展開されていると言えよう。これらは、今次教育課程の改訂の柱となった思考力・判断力・表現力などの育成や言語活動の充実などに対応している。

ただ、「思考力」というと、とかく生活科では理科学習へのつながりを意識したおもちゃづくりをイメージする。先に述べた16授業の中で8授業が、内容(6)自然や物を使った遊びに関した授業を公開していることにも表れている。

Ⅲ 子どもが考え始めるには

子どもの「考える力を育てる」と言っても、科学的な授業を展開することではない。まずは、生活科の原点に戻ってみたい。

2年ほど前にならうか、ある高校生向け大学及び研究室紹介のHPを作成している会社から取材を受けた。「生活科を一言で言うと」という質問に、「生活科は、すべての教科の学びの基礎です」と回答した³⁾。

今さら言うまでもなく、生活科では、決められた多くの知識を詰め込む教育でなく、体験を重視して、子どもの主体性を育成することを大切にしている。すなわち、授業だけの学びでなく、授業で取り上げたことを学校の休み時間はもちろん、放課後や休日に、家庭や地域でもその延長線上で、主体的に学ぶ姿を期待している。そうすれば、義務教育が終わっても、大学に入学しても、社会人

になっても、主体的に学べる資質や能力を養うことができると考えられたからである。主体的に学ぶとは、自ら考え判断することにほかならない。このような生涯に渡って学び続けることができる力の育成を目指す理念のもとに設置されたのである。

主体性の育成を目指す生活科では、子どもの思いや願いを大切にする。単元や授業の始めに、教師が、「○○しましょう」と投げかけるのではなく、子どもから、「○○してみたい」という思いや願いを引き出すような環境づくりが必要である。

例えば、野菜の栽培では、野菜づくりに堪能な地域の方の話を聞いたり、近くの苗屋さんを見学したり、野菜に関する絵本を読んだりして、「ぼくは、お母さんも大好きなミニトマトを育てたい」「私は、ナスが嫌いだけど、自分で育てて好きになりたい」などといった思いや願いを抱くのである。実際に、野菜が嫌いだった子どもが、自分の思いや願いの実現に向けて、苦労しながら愛情を込めて世話をして育てた野菜を食べられるようになった事例は、これまでにいくつもある。

このように考えると、生活科の単元づくりや授業づくりは、子どもの思いや願いに基づく意欲を柱にして考えることが重要である。「これは、ほんとうに子どもがやりたい活動なのか」「教師側の都合でやらせてしまっているのではないのか」と常に自問自答してみる。なぜなら、子どもは、自分ごとでない、本気で(主体的に)考えようとはしない。「本気で考える」とは、子どもが、学習対象に対して自らの思いや願いをもったとき、すなわち、学習対象に対する関心・意欲が高いときだからである。また、考える状況に子どもを立たせれば、今回の改訂でキーワードとなっている気付きの質は、自ずと高まるであろう。

ここで整理すると以下ようになる。

- ・考える状況に子どもを立たせれば、自ずと気付きの質は高まる。
- ・自分ごとでない、子どもは、本気で考えようとはしない。本気で考えるとは、自らの思いや願いをもったとき、すなわち関心・意欲が高いとき
- ・生活科の単元づくりや授業づくりは、子どもの

意欲を柱にして考える。

IV 子どもの思いや願いを中心に据えた授業を

◆ 公開授業の本時の授業をどうするか

II 及び表 1 で示した授業番号⑨（豊橋市）と授業番号⑩（田原市）で参観した授業を取り上げる。外部から講師を招いての授業研究会や研究発表会当日の公開授業では、遅くとも 1 週間前、早ければ、ひと月以上も前から公開日の本時を構想して、学習指導案を作成することになる。どの教科でも基本は、子どもの意識の流れに添って、授業の展開を考えていく訳だが、特に、低学年の子どもを対象とする生活科では、ひと月も先のことは、なかなか予測することが難しく、ややもすると公開日の本時案に合うように前時まで、子どもを引っ張ってきてしまったり、安全策で発表会の授業にしてしまったりすることがある。これでは、せっかくの公開授業の価値が下がってしまう。公開直前まで、子どもの意識の流れを掘り起こし、授業に臨みたいものである。

以下に取り上げる 2 例は、事前に配布された本時案を大幅に変更し、子どもの意識の流れに添った展開に勇気をもってした事例である。

◆ 大根は 1 本にするか 2 本にするか？

10 月 26 日に、豊橋市教育委員会から 3 年間の委嘱で、岩西小学校が、地域連携研究発表会を開催した。A 先生は、2 年 3 組の担任である。3 年間、学校研究の中核となり推進してみえた。2 年 3 組は、単元「ガンバ！ビックスマイルだいこん作り」で授業公開することになっていた。夏野菜作りで、子どもたちは、収穫の喜びを感じた一方で、市販の野菜と比べて、小さかったり、形が悪かったりいたことには不満を感じていた。そこで、「店で売っているくらいの大きなだいこんを作りたいな」という願いをもとに、地域で農業を営む B さんとかかわりながら、栽培を進めてきた。

事前に郵送されてきた「授業案集」では、次のような本時の構想になっていた。

目標：畑や肥料袋のだいこんと B さんの畑のだい

こんを比べることで、もっとビックなだいこんを作ろうとする意欲を高めることができる。

展開：自分のだいこんと B さんのだいこんを比べて、葉が大きくて緑が濃い。虫が少ないなどの事実から、その理由を考える。

↓

自分のだいこんを大きくするためにどうしたらいいのか考える。

・肥料 ・虫取り ・日当たり など

↓

これから頑張りたいことを書く。

しかし、かなり前に構想した案は、大根の成長に合わなくなっており、当然、子ども意識の流れとは違っていた。そして、思い切って本時を次のように変更した。

目標：B さんの畑に行って、見てきただいこんの様子や B さんから聞いてきた話を出し合ったり、友達の思いや B さんの話を聞いたりしながら、今後、自分のだいこんをどのように育てるか考え決めることができる。

展開：B さんのだいこんと比べて、大きさは同じくらいで安心した。肥料袋の中のだいこんは、同じように育たないと言っていたよ。

↓

肥料袋の中のだいこんを 1 本にするか、2 本にするか話し合ってみよう。

↓

B さんの話を聞いて考える。

↓

1 本にするか 2 本にするか理由を添えて振り返りを書く。

以前の構想に比べて、話し合う内容が、具体的に低学年の子どもに合った自分ごとになっている。座席表には、「1 本派」が 24 人、「2 本派」が 6 人、そして、それぞれの理由が書かれていた。各自の肥料袋で育てている大根を 1 本にするか 2 本にするかは、まさに自分ごとであり、子どもたちは、自分の考えをもとに発言し、盛り上がった授業となった。最後に、隣の教室の前あたりで、授業の様子を見守ってみえた B さんの姿を見つけた子どもが、手を引いて教室に B さんを連れてき

た。Bさんと子どもたちの距離の近さを実感する場面であった。Bさんは、子どもたちが真剣に考えている様子を誉め、どちらでもできる内容で話をまとめられた。以下は、「2本派」のC児の振り返りである。

わたしは、ぜったい2本にしたい。わけはこれからもいっしょうけんめいお世話して、大きい2本の大根にして、かぞくみんなで食べたいです。ママにだいこんみそしるを作ってもらって、かぞくみんなで食べたいです。
(下線は筆者による)

話し合いを通して、自分の大根に対する愛着や「かぞくみんなで食べたい」という思いがますます深まり、これからも大切に世話をしようという気持ちが高まっている。子どもの意識の流れを把握し、本時を変更したからであろう⁴⁾。

◆ 体育館で場所決め！

田原市立東部小学校では、田原市教育委員会から3年間の研究指定を受けて、研究主題「体験をもとに学び合い、考えを深める子を目ざして」として、実践研究を進め、平成24年11月1日に研究発表の予定である。10月27日に校内研究授業を行った。

2年生担任のD先生は、田原市の生活科教育の中核的な存在である。風・ゴム・磁石を使ったおもちゃづくりの単元を構想し、実践してきた。事前に送られてきた本時の構想は、保育園児を招いての「おもちゃまつり」に向けて、班ごとに説明をして、分かりやすい説明かどうかをみんなで考える。その後、友達の見解を聞いて、班で話し合い説明の仕方を決定するといった展開であった。このような展開の授業は、これまでも数回参観したことがあるが、なかなか意見がかみ合わず、それほど深まりのない展開となる。各班の説明は、準備されたものであり、子どもたちにとって、それほど切実感があるものではないのが実状であったように思う。

子どもたちにとって、切実感のあることは、説明の内容でなく、体育館のどこで、それぞれの班

が、つくったおもちゃを展開するかであるとD先生は考え、思い切って本時の構想を変更した。各班の活動場所は、ややもすると教師が勝手に決めてしまい、せつかく子どもたちが、考え判断する機会を奪ってしまいかねない。

まず、9つの班が、体育館の中で、自分たちのやりたい場所に、移動し、看板や道具などの準備をした。その後、いくつかの問題が出てきた。例えば、「磁石を利用した魚釣り」の班と「風を利用した車」の班は、いずれも体育館の入り口付近に陣取っていた。風を送りながら車を追って来ると、魚つりを待つ列に突っ込んで行ってしまう。「どうしたらいいだろう」、子どもたちにとって、切実な問題である。「魚つりを待つ列を体育館の壁に添って、並ぶようにしてはどうか」、「車の方は、この線からスタートして、この線で折り返して、こちらにゴールすれば、ぶつからないし、次の班にも行きやすいよ」など、現場を見て、実際に列をつくったり、車を走らせたりしながら真剣に考えることができていた。この授業を位置付けたことで、学級全体で、保育園児を招いての「おもちゃまつり」を成功させようという思いが高まっていったと感じた⁵⁾。

教師が授業のしやすい場面を公開授業に位置付けるのではなく、子どもの意識の流れをつかむアンテナを常に高く上げ、子どもにとって切実感のある話題（自分ごと）で、授業を構想すれば、自ずと子どもが、本気で考え合う授業が展開できることを忘れてはならない。

V 授業のどこで、子どもの思いや願いを深めるか

◆ 聴き合い・響き合う授業づくり

教師になって1・2年目の若い先生方の授業もいくつか参観した。授業番号⑥（豊川市）の授業を取り上げる。

御油小学校では、「聴く」をベースにして、平成20年から、実践研究に取り組んでみえる。「聴き合う」とは、相手を受け入れ認めること、「響き合う」とは、心がふれあい共感し互いに高め合うことと定義している。「聴く」ということは「考

える」ことであり、私自身も最近、大切にしたいと思っていることの1つである。

◆ 教材は身近な公園

御油は、東海道の宿場町として発展した。当時の松並木が今でも保存されている。校区には、公園が多く、E先生は、そのうち7つの公園を教材として選んだ。

生活科における教材化の視点は、まず身近であること。学校の授業だけでなく、下校後や休日もその学習対象とかかわれることが大切である。次に、子どもの生活との結び付きが強いこと。繰り返ししかかわる中で、その学習対象への愛着が次第に高まり、自分ごととしてかかわって行くことができるからである。

まずは、7つの公園を学級全員で回った。子どもたちに共通の基盤をつくるためである。その後、26人が、自分の関心のある公園を1つ決めて、探検を繰り返すのである。単元構成のキーワードは、「フシギ」と「ヒミツ」である。公園を探検して、「フシギ」を探す。それを「ヒミツ」としてまとめ発表する。「ヒミツ」をかかわり合わせの中で、次なる「フシギ」が見えてくるのである。まさに、本校の研究テーマに沿った「聴き合い・響き合う」展開が可能になる。

また、公園を遊びの視点だけでなく、「もの（遊具や建物）」「ひと（公園にいる人・遊び方）」「しぜん（植物・昆虫）」を探検の視点としている。教室には、壁面という壁面に各公園ごとに調べたことが、先の3つの観点で色分けしたカードにきちんと整理して貼られていた。

◆ 本時の授業では

授業は、23時間扱いの単元の22時間目であった。新任でこの長い単元を構成しよく進めてきたものである。パソコンを駆使した公園クイズから始まり、公園への思いを掘り起こした。子どもたちは、「松の木の根元」「切り株」「U字構」を見ただけで、どの公園か正解を出すのに驚いた。授業以外でも子どもたちが公園とかかわっていることがよく分かった。

そして、本時は、「まつなみき公園」と「ふる

さと公園」を調べたグループの発表とそれをもとにした質疑で展開されていった。発表も上手で、質問も数多く出された。板書も前夜、同学年の先生方と模擬授業をしながら練ったものであった。

「ふるさと公園」班の発表の中に、公園のプレートにかかれた昔遊びを実演する場面があった。6人の子どもたちが「かごめかごめ」を始めるとE先生もさっと子どもたちと手をつなぎ回り始めた。「後ろの正面だーれだ」のときには、E先生が後ろに。鬼の子どもは驚き、教室全体がわいた。研究授業にもかかわらず、さっと子どもの輪に入ることができるE先生。日ごろから子どもと一体になって生活している様子がよく分かった。授業は、学習指導案どおり進み、ほぼ時間どおり終わった。新任教師としては、合格点だったかもしれない。しかし、何か表面的な展開に物足りなさを感じた。

◆ どこで深めるか

2つの公園、3つの観点、それをこなすことだけにおぼれてしまったのではないか。

例えば、「まつなみき公園」の発表では、発表者のF児が、まつなみき公園の近くに新しい公園が造られていることを知らせた。G児がそれを聞いて、「Fさんは、新しい公園ができたなら、どっちの公園で遊びますか」と質問した。F児は、「まつなみき公園です」と答えた。ここは、深めどころだったと感じた。教師が、「もし、みんなの調べている公園の近くに新しい公園ができたなら、どっちで遊びますか」と問いかけ、その反応に対して、訳を尋ねたら、それぞれが調べた事実や公園への愛着をもとに、意見が交わされ、きっと盛り上がりが見られたと思うがどうであろうか。

また、「ふるさと公園」の発表では、H児が、公園を一周すると3時間程度かかる大変広い公園の中に、ごみ箱が1つもないことを「ヒミツ」として発表した。ここもほかの公園とのかかわらせどころである。教師が、「ほかの公園はどうか」「ごみ箱はあった方が便利でないのかな」などと揺さぶることによって、公園の公共性や管理・維持する人の存在やその必要性にも子どもたちの目が向いていったのではないだろうか。

要するに、単なる発表そして質問でなく、どの事実に焦点を当てることによって、子どもの学びが深まっていくのかを絶えずアンテナを高くあげ、敏感に感じて、子どもと真剣勝負をしていくという「どきどき感」をもって授業に臨む姿勢が大切である。学習指導案はあくまで「案」である。また、時間的にゆとりをもった展開を考えておかないと、子どもの興味深い発言にからめて深めていくこともできなくなる⁶⁾。

VI 「話し合い」の授業

◆ 生活科の学びの高まり

「聞き合う」「紹介し合う」「発表し合う」「教え合う」「話し合う」と表現やそのレベルは様々であるが、十分な体験を基にして、一人一人が自分の考えをもち、それを出し合いながら、さらに考えを深めて行こうとする授業を数多く参観できた。体験はもちろん生活科で行う訳であるが、国語科や日々の学級経営の中で、聞いたり話したりする積み重ねが重要である。

思いや願いをもって、体験をすれば、自分なりの感じ方や考えをもつことができる。それを上手に言葉にできる子もいれば、漠然としていてなかなか言葉にできない子もいる。それぞれの感じ方や考えを出し合うことで、同様に感じ方や考えに触れ自信をもったり、違った感じ方や考えを知ることによって自分の感じ方や考えをよりはっきりさせたりできる。あるいは、考えを広げたり深めたりすることができる。たとえ、発言しなくてもしっかり聞いていれば、上記の状態に至るのは可能であろう。このように、体験とそれを基にした意見交換の場を適切に位置づけることで、生活科の学びは高まっていく。

◆ いっごろから「話し合い」は可能か

平成 23 年度版教科書採択占有率で 6 割以上を占める光村図書の国語科の教科書によると、4 人に班での話し合いが登場するのは、第 2 学年の後半である⁷⁾。ただ、生活科学習指導案では、班だけでなく学級全体で「話し合う」「話し合わせる」などと本時の目標や学習活動、教師の支援によく

書かれている。要するに、国語科より先行している訳である。体験をベースに置いているので、ある程度の先行は可能であるかと思われるが、発達段階には十分に留意する必要がある。

授業番号⑭（西尾市）の授業を取り上げる。J 先生は、教職 2 年目で初めて 1 年生を担当された。発表に仕方などの学習規律、学級掲示など初めての 1 年生担任とは思えない学級経営をされていると感心した。授業は、秋から栽培してきたジャガイモをどのようにして食べるかをみんなで話し合い決定し、4・5 名の班ごとにカレーを作って食べることになった。子どもたちは、個々に家庭などで取材し、ジャガイモ以外にどんなものを具材として入れるか決めている。一人 100 円の予算、すなわち班で 400 ～ 500 円以内で、カレーの具材を班ごとに決める授業を参観した。各班には、本物の鍋が用意されていた。また、各班の子どもが入りたいとワークシートに書いた野菜や肉類などが、話し合いやすいように 100 円単位にして、例えば、「ニンジン 2 本で 100 円」「ぶたこま肉 100 グラムで 100 円」など絵カードなどで用意されていた。本時の目標は、「カレーパーティーに向けて、入りたい具材を班で話し合うことができる」とされていた。当然、一人一人が取材し、入りたい具材が違うため、予算の範囲に収まらない。そこで、話し合っ、自分の入りたい理由を班員に納得させたり、バランスや彩りなどを考えたりして 4 種から 5 種に決める訳である。興味深い授業場面であると思う。ただ、実際は、なかなか話し合いがかみ合わなかった。決定的な理由がなかなか出されず、じゃんけんをしたり、発言力の強い子が強引に決めてしまったりしていた。J 先生は、かなりの準備を試みえたが、1 年生の 12 月始めという時期に、班ごとの話し合いは少し早いのではなかったか。

次に、授業番号⑧（安城市）の授業を取り上げる。K 先生は、教職 8 年目であるが、低学年は数回担任されている。2 年生が、町探検で訪問したデイサービスセンター「あんだんて」に、めあてを新たにしながら繰り返し訪問し、交流する中で、自分や相手のよさに気付かせようとするのをねらった単元である。

参観した授業は、お年寄りを喜ばせたいと計画を立て、「あんだんて」に2度目の訪問をし、各自で振り返りを行った後の授業である。まずは、「あんだんて」のスタッフのLさんから、先回の訪問後のお年寄りの様子について話を聞いた。その後、「お年寄りをもっと笑顔にするための工夫をしよう」という課題を確認し、4・5名の班での話し合いとなった。具体的な体験をしているので、「Pさんのために、ボーリングの玉を大きくしたい」「Qさんが持ちやすいように、釣り竿を太くしよう」などの意見が出た。何か疑問が出るとスタッフのLさんを班に呼んでアドバイスをもらっていた。また、担任のK先生が、2度目の訪問の班ごとの問題点を分析したものをまとめた「アドバイスカード」を適切なタイミングで示すことで、有効な話し合いが進められていた。

先の授業番号⑭の事例との違いは、1年生の12月と2年生の10月という約1年の違いと具体的な体験に基づいた話し合いであることであろう。また、Lさんの励ましに触発されて、子どもたちが、「もっとお年寄りを笑顔にしたい」という意欲の高まりがあったためだと考える。

さて、「聞き合い」「話し合い」などは、一人一人の子どもの言語力を高めておく必要がある。それには、まずは、ペアでコミュニケーションを取るところから始めたい。光村図書の国語教科書でも1年生の5月ごろに、「ふたりで おはなし」という小単元があり、絵を見ながら、「なにがいますか?」「さるが います。」「どこに いますか?」「きの うえに います。」といったやりとりをする内容が載っている⁸⁾。小学校入学当初からペアで対話できる能力を高めてから、4人の班、そして学級全体へと発達段階を追って、「話す・聞く力」を高めていく必要がある。

◆ 板書力と発問力

話し合いなどから、子どもの考える力を育てる授業を構成するときに必要なのは、教師の「板書力・発問力」である。これは、「教師の言語力」と言ってもよいであろう。電子黒板が徐々に普及していると言っても、教室の前面には大きな黒板があり、最大の教具と言える。特に、話し合いの

授業では、黒板を効果的に活用するかどうかで授業の善し悪しが決まると言ってもよいであろう。授業番号⑥⑨⑮などの授業は、綿密な板書計画が立てられていた。本時の授業案ができれば、それを基にして、板書計画を作成し、実際に教室で黒板にかいてみる。そして、そのような板書に果たしてなるのかという観点から、足りない部分を明確にし見直していく。その際、当然、具体的な授業場面を想定して、言葉かけの吟味をすることになろう。子どもが自分ごととしてとらえている学習対象と教師の発問、板書によって、子どもの思考は深まり、互いに絡み合っていくものであろう。

Ⅶ おわりに

気付きの質を高める授業づくりから、子どもの考える力を育てる授業づくりへと三河地区の生活科授業の重点は移りつつある。本稿でも述べたが、その基本は、子どもの思いや願いを大切にし、子ども理解に努めることである。子どものつぶやきに耳を傾け、子どもとの対話を大切にすることこそ考える力を育てる基礎となると考える。

<参考・引用文献>

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領解説生活編」
日本文教出版 2008年
- 2) 中央教育審議会「答申」2008年1月 pp.24-26
- 3) 教授の授業
http://www.enjoyment.jp/prf/aichi-edu/noda_atsumori/index.html
- 4) 野田敦敬「子どもの意識の流れを大切にしたい構想」日本学び方研究会会誌「学び方」平成24年2・3月号 pp.6-9
- 5) 上掲書4)
- 6) 野田敦敬「若き教師のチャレンジに拍手」日本学び方研究会会誌「学び方」平成23年10・11月号 pp.8-11
- 7) 光村図書平成23年度版小学校第2学年下教科書「こくご 二下 赤とんぼ」pp.85-87
- 8) 光村図書平成23年度版小学校第1学年上教科書「こくご 一上 かざくるま」pp.20-21